後京資基うてあるはいやしうて仮よそ人いかに
らおろかなるもとのつまとのみてつゝけるに
ひとりもあるべきさまにて侯事なりとて
やがて国いろ〳〵云ふものゝ書ける
歌乃まへに人丸のよるあるといつる歌きてそこと
きてそうかきものゝ人丸墓とまうしはきて
かゝいふ地ゝ侯ん所なりける
世代へてもあるべきなりけるを歌日きて前にもちせさりれ
うたもちものゝ名をあまるこあやゝ紀貫をうんたるる
右清輔朝臣集玉花庵定家卿本書寫校合

源師光集

嘉祐八年

朝よりこ紀伊国ゆかりの和むらの浦より知新女房のもとへ
ゆく
ゆく途ある海士のもとみのかりの形ん殿こそる松の浦
嘉しくもこゝの浦ゆう業ちをいんあてやたつもりん
西中堂と云ことゝ侯
うゑひとゝは梅のくれ堂こゝまこゝや西ゝ者ゝ者ゝ
藤家堂
玄の本ぬ石とゝるとそや堂ゝ侯るこの仏ゝ侯うつとゝね
行路堂

昔の都よりさしそへたる梅の花をそへて

梅花

色も香もたがはぬ春にあひぬれば梅のむかしを忘るなりけり

みちゆく花

みちゆく花をたづねて

中将有房朝臣家の合に橘と

人をとはぬ人もなりけれ物ゆゑに山にもあらぬ山にもあらぬ

故郷花

ふるさとの花橘のまがきに袖ふれしかぜ人の恋しき

宰相入道教長家の合に尋山花

うき世をはなれいりて吉野山くれぬる春の明けぬ

とも

山ざくらさくらもちるもあるかぎりなくぬる白雪

ふるさとの春の夕の風にたぐひとさそふ嶺の白雲

鷲の尾にくらぶる時の白川の むかしをしのぶ

ぞ花大将実定さそくまてしらは法性寺の

いさやまさる月日のかりもたつぬるぬる むかしをしのぶ

花尋樵夫

花をとい花の法をやすぬつるさくらいはくと我をそへよ

白川の流れるむのさかりる花をつ碧家道のを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国五月郭公

さつきたちなれぬれば時鳥なれぬ時なるとのつきはなれ人の
山里に侍るこゝろ郭公くやと人の尋ぬ
しらはてゝ鳴てのよるも明るゝ程をしらしの八

経正朝臣

今もさはむかしもさらひ郭公なきいでそめしあやめ草
哉

左京大夫山ほとゝぎす古も過ぬ人はいとゝ恋くるぬ

夏虫

夏虫とうらやむ程に思ふ人はいとゝ
夏月

夏の月数の名残は秋もなほ惜みし
橘寄無常

見むとこそ思ひもまちもしぬるかの盛もなほ忘るゝ
七夕

秋の月ゆゑあることは七夕の逢瀬を待る宵の
棚機の織ひのうの夜ぬさ引の手人の色とはいとゝ
さらに秋あふことゝとゝもに七夕の言や久しく
雁

列ふまいてゝ人世とゝもに文ゆゑ数神の見ぬ

[illegible]

此間缺

重家卿家合歌

[illegible]

恋の[illegible]と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小野の郷とかやの人さうもとさまてとつる
侍
藤原ゆきまさ八浦くもまもれるみやこやとうらん
返し
ちのすむうらもくもるくう我八ねもとの人ゝ誰ゝ思人そハ
京へ四くるさて
山里もうらもあさたてハんやこ秋出ん心のこゝ
難波よりもゝてうて侍
九大将實定のもとに
なたた小秋のあくまハ物とゝ公ゝ侍ゝのもとに
返し

思ひやまとゝ知るのなゝ秋さゝ思ひいとふ秋人四るゝ
定長なふのもくさよゝ
もとよりくて侍
歌
定長
尋てもなくゝとハぬ芦のやなくこの方や此秋の藤の成
花のもとうるもたゝ成ゝの人もとゝん
侍
ゝとたゝ
ちくさとあくむそのう藤侍ゝ秋のあくまとゝくハ
中將隆房朝臣ものいくく隆侍ゝ月ゝ
侍ゝ四ゝ内女房のまくゝて法華寺へ

空てゝ立よりもそいとるの心仕りしのはようてよも
ちうう花て四人ゝもそこうまとようとつのくしたりし

隆房朝臣

あくてとそ四つ人ゝ四人ゝ月と宮とと空もよんてか

返し

月をうる宮の紀ゝてゝとまこそ妙ゝさ四ひあ秋右ゝ宮

秋の秋大宮とゝ風信ゝてうさくまつく仕□

いてゝそゝ人て清ゝくゝ秋

くまと秋ゝ月と宮とに大宮ゝ秋のひはゝ秋いつのゝと

月あゝく侍ゝ隆房朝臣のゝとよも

秋ゝあくて日四すゝ秋ゝ心のゝをさハと秋の月も勝ゝ秋

返し

月見ゝくゝますゝ秋ゝひゝ秋我ゝ四ゝ秋ゝとゝや勝ゝ秋

此間闕

大將ゝあゝて四月ゝ宮の隆ゝ房ゝとゝあ

左大將のゝとよも

宮ゝ隆ゝ房ゝ秋ゝ秋ゝ心のゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ尋ん

四人ゝ

はゝ秋ゝやゝくゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ谷の埋木

賀茂重保祢宜ゝ

ちくやゝの花の神山たうひあるとて林たうくうの花ゆえうまれて

ゆへ〜

神山のうゑし梅をゆうまちて秀つのふさそうまうの事

いとひ成

秀つのまゝにはたしもくつて花をのてまち花をあるも

秋は兼雅胡蝶字治よりかゝりて下つかたの

とさうしあるを歌のさいとおもてうまを秀つの花あるに見ひこそ

やを

返し　兼雅胡蝶

謝をや歌よ我字治山おもてうまを一ツ秀つ花物の花

久永四大臣家よりく梅待花やをいとと成

去よりく花命ハさくめ多宮ゆ一ツの木の梅とぬつる花

右大臣家歌合述懐

いまたにいとゝ物ゆ身とおもてむまゝぬはのよう物

廣田歌合同ゝ成

おく事ハ物ゆらをとも我たちの花ゆ

述懐十首中ゆ

高ゆ成おもひたちとおもてむたらひあるこゆ成

さうもたとてう形く世成も花むうを

高ゆうゝ花物ゆ命を花ハ人ゆ我身と

慰ゆ物ゆこそ多ゆ身ゆとひあてひ〳〵ふたらかるゆハ

例のぬしとたのふ侍るに七月十五夫婦の色
ゆゑなる
七夕の日と夜もすがらぬるゝ袖やのこりなく見えて
とゝたらしうん

此間闕

皇嘉門院近江世とそむきぬとなげてつくし
侍也

人みな若し死海に沉むまじけれとうひぬるあり小乘の
ぬし
ちりちりぬるゝ海の人とみてちりんと物あ

三條院ぬしをたのひて侍に河の内侍す
ゝとより
ゝゝふるゝ袖のつゆをぬきとゝ
ぬし
見をとやまひ物ふ神のまさりたるとと
人〳〵歌ひ集むること侍る集つゝん
ゝゝ

雪詠朝臣

人ゝとよおいうる時せたゝみ濃沢ゝ侍ゝ
ぬし
古〳〵のゝ思ひ出るゝのゝ侍ゝのさとを

海上眺望

胡為乎太行ちくる時よ知よりの時をめふすふ沖のゝ物舟

別

ゑゝ涙ゝの力も遠ゝ為ゝも歌くらべやうて吹ゝぬ藤を世よ

陵園妾

松の戸と一ゝをむさしてあ字ゝ物とゝる人ゝ之の月

内閣文庫

昌平坂學問所

右源師光集秘有之寫徳元年仮板四

羣書類從卷第二百五十六

慶應乙丑

国立公文書館
National Archives of Japan